

# サハリン北緯 50 度旧国境を行く旅

ボーダーツーリズム in サハリン 樺太の今を訪ねる

2018 年 8 月 23 日～27 日

写真家 斉藤マサヨシ

## サハリン全行程約 800 キロの旅の始まり

2018 年 8 月 23 日、ユジノサハリンスク空港行き  
のオーロラ航空 HZ4537 便は定刻の午後 2 時 25 分新  
千歳空港を出発した。ユジノサハリンスク空港まで  
のフライト時間は 1 時間 25 分。50 人乗りのカナダ  
製ボンバルディア機は満席で、乗客は日本人が 4 割  
ロシア人が 6 割ほどであった。

サハリンは日本との時差が 2 時間ある。現地時間  
で午後 5 時 50 分ユジノサハリンスク空港に到着。専  
用バスで空港エプロンを移動、入国手続きを終えて  
空港ロビーに行くと現地ガイドのビートモ社のイリ  
ーナ社長とターニャさんが笑顔で出迎えてくれた。

台風接近の心配があったがユジノサハリンスクは  
青空で気温 18℃ほどで気持ちいい。30 分ほどでホテ  
ルパシフィックプラザサハリンに到着。ホテルで夕  
食を取った後、夜のユジノサハリンスク市内をぶら  
り、レーニン広場、チャーホフ劇場、公園を歩いた。

サハリンは北海道とほぼ同じ面積だが、南北に約  
950km ある。作家の司馬遼太郎さんは街道をゆくの中  
で「鮭を吊るしたような島」と表現している。

サハリンは日本列島と古代から密接に関わってき  
た。日本人のルーツは朝鮮半島を経由した大陸ルー  
ト、先島諸島を経由した南方ルート、そしてサハリ  
ンを経由した北方ルートとされている。

1875 年日本とロシアの間で樺太千島交換条約が締  
結された。それまでのサハリンは主のいない自由な  
土地で、樺太アイヌ、ニブフ、ウイльтаなどの北方  
少数民族の人々が独特の伝統文化を持ってくらして  
いた。



1904 年日露戦争が勃発、勝利した日本は 1905 年から 1945 年まで、サハリンの北緯 50 度以南の南樺太を日本の領土として国境線を設けた。

私たちはボーダーツーリズム in サハリンで北緯 50 度の旧国境線を体感する。

## 林蔵、チェーホフ、賢治ゆかりの地を辿ってサハリン東海岸を北上

8月24日、午前9時曇り空の中、ユジノサハリンスク市のホテルを出発したバスは、樺太時代の製糖工場（現在はチョコレート工場）、樺太時代の追分（現ルガボエ）を通過して鈴谷平原を北上している。バスは樺太庁の農事試験場があったノボアレクサンドロフスク（旧小沼）、旧日本軍の飛行場があったソーコル（旧大谷）を通過してドリンスク駅（旧落合駅）に着いた。

ドリンスクは、日本時代の落合で小さな寒村であった。1911年に栄浜まで鉄道が開通し、落合駅が開設。1917年に日本化学紙料が製紙工場（のち王子製紙落合工場）を建設して開業したことで急速に発展した。

私たちは日本時代の駅ホームが一部残るドリンスク駅で休憩。王子製紙落合工場跡を道路から眺めてバスに乗り北上を続けた。

ドリンスク（旧落合）を出発したバスは、15分ほどで宮沢賢治ゆかりの地スタロドブスコエ（旧栄浜）に到着。私たちは、1923年8月賢治が降り立った栄浜駅があった場所を散策することにした。駅舎はもちろん鉄路も既に無い。ハマナスなどの草地に、埋もれた鉄路の枕木がわずかに残っていた。

サンダル履きのロシア人男性が私たちに声をかけてきた。どうやら日本人の私たちに見せたいものがあるようだ。2分ほど歩くと彼の自宅があった。自宅前には「南無阿弥陀仏」と刻まれた石の円形台座があった。何かの一部であろうか詳細はわからない。彼は私たちに栄浜の海岸で採取した琥珀をプレゼントしてくれた。見かけはともかく、気のいいロシア人との出会いであった。

バスはスタロドブスコエを出発、賢治が「銀河鉄道の夜」をイメージしたのではとされている白鳥湖で一時停止。車窓から白鳥湖を眺めてさらに北上した。

バスは、オホーツク海を右に見て海岸沿いの道路を走る。1808年間宮林蔵はこの海岸を樺太アイヌの小舟に乗って海岸沿いに北上している。私たちは林蔵と同じ景色を楽しんでいる。200年前と違うのは道路が走っていることぐらいであろう。

間もなくヴズモーリエ（旧白浦）に着いた。ヴズモーリエの海岸に近い山の中腹に神社の鳥居が残っている。

東白浦神社跡に残された鳥居だ。白浦は漁業で栄えた所だ。地元の漁師や有力者が豊漁と安全を祈願して建立したに違いない。

ヴズモーリエからポストーチナエ（旧元泊）までは峠越えになる。

ヴズモーリエ駅はサハリン鉄道の東海岸と西海岸を結ぶ拠点で、駅前通りにはカニ売り



の露天が並んでいる。売られているカニはほとんどがタラバガニで、小さなものは 500 ルーブル（約 1000 円）、2kg ほどの大物で 1500 ルーブル（約 3000 円）。

1 人 100 ルーブル（約 200 円）を出し合って中ぐらいのタラバガニを購入。カニ売りのお姉さんにカニを捌いてもらい、その場で立ち食いそばならぬ立ち食いカニ。これが何とも美味しかった。やはり冷凍ものとは大違いである。すっかりタラバガニのとりこになった私たちは、帰り道にまた購入を約束してヴズモーリエ駅の露天のカニ売り場を後にした。



ヴズモーリエ駅のカニ売り

バスは峠を越えて再びオホーツク海に出た。天気は快晴、透き通るようなサハリンブルーの空が広がっている。ユジノサハリンスクのホテルを出発してから約 4 時間、マカロフ（旧知取）に着いた。樺太時代の知取駅前通りにあるレストラン「リュークス」で昼食、ボルシチなどロシア料理を堪能した。樺太時代、このレストランの隣には、渡辺写真館があった。ツアーに参加した渡辺博之さんの生家である。この土地に立った渡辺さんは感慨無量であった。

私たちは昼食を済ませた後、石段を登り、かつての知取神社跡を訪ねた。そこには本殿の基礎、灯籠の台座などが残されていた。

マカロフには、1943 年 11 月 24 日、樺太公立第一国民学校の火災で殉難した 23 名の子供たちの慰霊碑が立っている。渡辺さんの母校である。渡辺さんは今は異国となった地で眠る同胞の子供たちに花と持参したお菓子を捧げた。私たちも深々と頭を下げ、冥福を祈った。



バスはマカロフを後に、ポロナイスクを目指して北上した。

### 生まれ故郷に立つ横綱大鵬像

午後4時50分、ポロナイスク(旧敷香)に到着。まずはポロナイスクの博物館を見学する。管内には北方少数民族の伝統文化が樺太アイヌ、ニブフ、ウイльта、エベンキ、ナナイと民族ごとにコーナーを設けて見やすく展示されている。民族文化に興味がある方は必見の場所である。

ポロナイスク市内には不世出の大横綱大鵬の像が立っている。博物館を出た私たちは、大鵬像を訪ねることにした。像は日本とロシアの関係者によ



ポロナイスク市に立つ横綱大鵬像



ポロナイスクの民族博物館ニブフの展示コーナー

て2014年8月15日、ゆかりの地に建立された。大鵬(納谷幸喜)は、ウクライナ人の父と日本人の母の三男として1940年5月にこの地で生まれた。戦後、母とともに引揚船小笠原丸で大泊港から小樽港に向かったが、母の体調不良により稚内港で途中下船した。稚内を出港した小笠原丸は留萌沖で魚雷攻撃を受けて沈没。多くの日本人が犠牲となった(三船殉難事件)。数奇な運命を辿った大鵬は不世出の大横綱となった。今、父の実家があった同じ場所に立つ大鵬像はロシア人にも愛されている。

### 渡し船で先住民族戦没者慰霊碑が建つサチへ

8月25日午前9時、ポロナイスクのホテル・セイビエルを出発した私たちは、サハリンの大河ポロナイ川の渡し船に乗った。サチと呼ばれている先住民族が数多く暮らす場所を訪ねるためだ。サチの奥には日本時代にオタスの杜と呼んだ土人部落があった。

サハリンには、日本人やロシア人が進出する以前から住んでいたニブフやウイльтаなどの先住民族の人たちが多数暮らしている。

日本が統治した時代、樺太庁はオタスの杜に先住民族を半ば強制的に移住させて、日本語教育を行った。彼らは生活のため、自分たちの言葉のほか、ロシア語、日本語も話す必要性があった。第二次世界大戦が始まり、ソ連が中立条約を無視して北緯 50 度旧国境付近が緊張状態になると日ソ双方とも諜報活動が活発になった。現地の旧日本軍は、ロシア語が理解できて地形に詳しい先住民族の若者を徴用したのであった。当時のソ連軍も同じように徴用していた。日本及びソ連の諜報員として活動した彼らの多くは戦争犠牲者となったのである。今、サチ（オタスの杜）には、戦争の犠牲となった先住民族を慰霊する碑が静かに立っている。



サチへの渡し船



サチに立つサハリン先住民族戦没者慰霊

### 北緯 50 度旧国境を訪ねる

渡し船でサチから戻った私たちは、ポロナISK市内で巨大な廃墟となっている王子製紙敷香工場跡を見る。当時最新鋭の設備を誇った工場も今は廃墟となり、巨大な煙突だけが威容を誇っている。

私たちを乗せたバスはポロナISKを後にしてさらに北上する。レオニードボ（上敷香）で旧日本軍の師団跡、朝鮮人虐殺慰霊碑を訪ねて北上。スミルヌイフ（気屯）のレストラン「イズブーシュカ」で昼食をとった。天候は快晴。昼食後はさらに北上、パペジノ（古屯）の町外れ、旧八方山近くに樺太・千島戦没者慰霊碑がある。今だ数多くの兵士が眠るこの地で私たちは献花をした。渡辺さんのリードで「ふるさと」を合唱して戦争犠牲者の冥福を祈った。





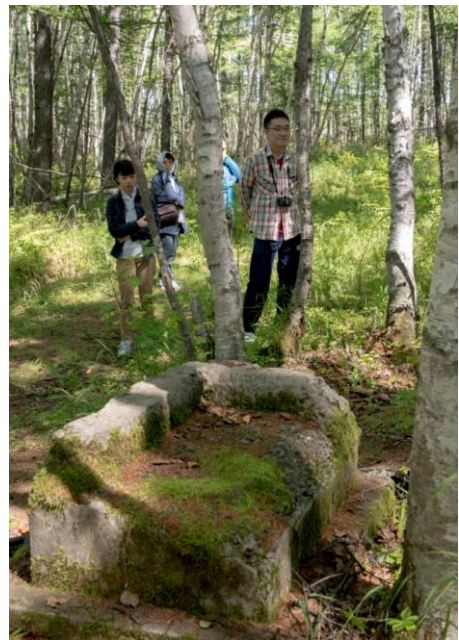
樺太・千島戦没者慰霊碑で「ふるさと」を合唱して冥福を祈る

バスはさらに北上して、まもなく北緯 50 度線に到着した。

道路沿いにはソ連軍戦勝記念碑が誇らしく建っている。その脇にある草が繁茂した細い荒道を 100 メートルほど進むと、旧日本の国境を標す石が置かれていたコンクリート製の台座がある。1905 年から 45 年まで北緯 50 度以南のサハリンは日本の領土であった。サハリンの北緯 50 度線約 130 キロメートルを国境と定め、天測点である 4 カ所に国境を標す石を設置した。この国境石は東から天 1 号、天 2 号、天 3 号、天 4 号と呼ばれ、南面に菊の御紋、北面はロシア皇帝の紋章である双頭の鷲が彫られていた。実物はサハリン州郷土博物館（天 1 号）と根室市博物館（天 2 号）に展示されている。

今、私たちが訪ねた国境石の台座は天 3 号のものである。手元のスマホの GPS で測ると 3 秒南側にずれていた。

1905 年ポーツマス条約により北緯 50 度以南は日本の領土となったが、条約の中にサハリンを非武装とする旨の条項があったため、国境警備は軍隊ではなく、警察が行っていた。このため、緩い国境で、昭和の初め頃までは国境観光が盛んで、団体ツアーも企画されるほどであった。1925 年 8 月の鉄道省が主催した樺太観光団には北原白秋も参加して国境観光を楽しんでいて、その時の旅行記「フレップ・トリップ」を著わし



北緯 50 度線旧国境天 3 号国境石台座にて

ている。

しかし、1945年8月9日未明、ソ連軍は北緯50度線を越えて南下、対峙していた日本軍と戦闘状態になり、多くの犠牲者を出すことになった。国境、いわゆるボーダーと呼ばれる場所は、時には面白く、楽しく、時には苦しく、悲しい、時代とともに移り行く場所なのかもしれない。

### 北緯50度旧国境線に残されたトーチカ

旧国境石台座を訪ねた私たちは、ポロナイスクに戻ることにした。

北緯50度旧国境線を南下して直ぐの道路沿いに、旧日本軍のトーチカが残っている。

半田沢川沿いに残るトーチカがある周辺は、1905年に南樺太を領有した日本の国境警備の最前線でした。先にも記述したとおり非武装であったため、国境警備を担ったのは警察守備隊でした。ここ半田沢にも半田沢警察署が置かれていて、365日24時間体制で国境警備にあたっていました。1938年1月女優岡田嘉子と演出家杉本良吉の二人は、国境警備の警察官を慰問する目的で北緯50度線旧国境線を訪ねました。そのまま国境線を無断で越えてソ連へと逃げたのでした。当時は新聞等で「赤い恋の逃避行」と騒がれたのでした。



北緯50度線旧国境近くに残る旧日本軍のトーチカ

その後、1939年に国境警備法が施行されて軍が警備することになり、1941年日米開戦、1943年気屯（現在のスミルヌイフ）に日本軍が歩兵125連隊を配置。穏やかであった北緯50度線旧国境線が緊張することになったのです。そして1945年8月11日から12日にかけて中立条約を無視してソ連軍が侵攻、国境線は激しい戦場となった。

私たちが眼前にしたコンクリート製のトーチカには無数の弾痕が残されていた。今も兵士たちが眠るトーチカ周辺には夏草が繁っていた。



## ユジノサハリンスクに戻る

8月26日午前9時、ポロナイスクのホテル・セイビエルをチェックアウト。バスは霧に包まれた道路を南下。スタロドブスコエの海岸で琥珀拾いを楽しむ予定であったが、悪天候のため中止。来るときにタラバガニを食べたヴズモーリエ駅のカニ売り露天に立ち寄った。1000ルーブル（2000円相当）でタラバガニ2匹を購入。皆でドリンスクの昼食レストランで食べることにした。

ドリンスクのレストランに着くと、さっそくタラバガニを解体。食卓にはロシア料理とともにカニ足が並び、私たちは舌鼓を打った。

## ユジノサハリンスク市内観光と買い物

ユジノサハリンスク市内に戻った私たちは、サハリン州郷土博物館を見学。1937年樺太庁博物館として建設された建物をそのまま使っている。当時流行した帝冠様式（鉄筋コンクリートの洋館に和風の屋根を載せた建築様式）で、今はサハリンを代表する建物の一つになっている。博物館には、日本時代の貴重な展示物があって必見である。

博物館見学の後は、サハリン最大のショッピングセンター「シティ・モール」で買い物をしてからホテルにチェックイン。夕食はニシン料理が特徴的なレストラン「フタローク」でウクライナ料理を味わった。

## サハリン南部を訪ねる

8月27日午前9時、ユジノサハリンスクのホテルを出発、コルサコフ（旧大泊）に向かう。コルサコフはサハリンで最も古くから拓かれた町で、アイヌ語でポロアントマリ、クシュンコタンと呼ばれ、江戸時代末期には幕府の番所が置かれたいた。

私たちは日本時代に築かれた栈橋が残るコルサコフ港が一望できる高台に来た。日本時代は神楽岡公園と呼ばれ、市民に人気のあった憩い場だ。今、高台には古びた灯台が残るだけで、人影も無い。

コルサコフの街を展望した私たちは、アニワ湾へと向かった。

アニワ湾にはサハリン北部の油田地帯からパイプラインで輸送された天然ガスを液化する大規模なプラントがある。プリゴドノエ（旧深海村）にあるプラントは、年間960万トンの駅かガスを生産する能力がある。





このプラントで生産された液化ガスの約半分は専用船で日本に運ばれ、発電所などで使われている。私たちは、バスでプラント周辺を巡った。ちょうど液化ガス運搬船が専用栈橋にいてガスの積み込み作業中であった。

この液化ガスプラントの近く、メレイの海岸近くの高台には、旧日本軍の上陸記念碑が横倒しになって残されている。1905年7月、日露戦争の日本海戦に勝利した日本軍はこの海岸に上陸。1か月の間にサハリン全土を占領した。その記念碑である。

メレイ海岸の丘には海底ケーブルの中継所跡が残っている。樺太時代には北海道猿払村と海底ケーブルで結ばれていた。猿払村にはその記念碑が立っている。

私たちは、メレイの海岸を後にしてユジノサハリンスク市内に戻った。勝利広場、栄光の広場（樺太神社跡）を見てから土産店「ゲルメス」で買い物を楽しみ、昼食を取った。

昼食のレストラン「メガポリス」はバイキング方式で日本人の口にピッタリの料理が並んでいる。昼食後はユジノサハリンスク空港に行き、出国手続きを済ませ、16時20分発のオーロラ航空 HZ4536 便で帰路に着いた。